



YAMAGA

近代の山鹿の
偉人たち
シリーズ

025

故郷を掘り起こし発信し続けた文人（一九一九～一九六五）

木^き村^{むら}祐^{ゆう}章^{しょう}

民俗学研究者。熊本県文化財専門委員。熊本在住の放送作家。折口信夫の影響で、昔話、民謡、民俗芸能を調査、郷土資料の発掘、整理をおこなった。国指定無形文化財の肥後琵琶の調査、保存にも尽力した。初代放送作家協会九州支部長として、九州と山口県内のラジオ局で大人から児童向けと多彩な脚本を執筆し、それ以外に構成や放送関係の人材育成も手掛けた。代表作は天草のからゆきさん（海外出稼ぎの女性）の一生をテーマにした「ぬれわらじ」、「おばあちゃんの民話」など。編著書に『鹿本郡郷土研究資料』『肥後昔話集』などがある。

大正八年に生まれて

大正八（一九一九）年に熊本県鹿本郡山鹿町一〇一〇番地に木村芳太郎、フサの二男として生まれ、祐章と名付けられました。兄は計介で仲のいい二人兄弟でした。

父芳太郎の生家は中町で、現在の油屋と江上薬局の間にあり、「墨屋」を屋号とする商家でした。菩提寺長源寺の古い過去帳によれば、木村家の初出は正保二年（一六四五）にまで遡り、木村与右衛門と姓を名乗っていました。想像するにこれは山鹿手永会所の役人を勤めていたかもしれません。ほかは墨屋の屋号で書かれています。長源寺境内に多くある墓石の造りや大きさから墨屋の盛衰を偲ぶことができます。

ペンネームは、NHKの契約作家としては本名の祐章（読みはゆうしょう）を、民間放送では墨屋二郎、ほかに高木計という鍛冶屋だった母の実家の姓も使用しました。

墨屋は祐章の曾祖父の時代に零落、父芳太郎は熊本市の質屋に丁稚奉公で、苦勞に耐えて、山鹿に帰ると大店の江上屋洋品店の番頭を勤めました。祐章が六歳の頃、桜町の江上家の地所を買い、塩、タバコ、燃料などを扱う雑貨店を始めました。芳太郎は二人の息子が家業を継ぐことを望みましたが、六つ上の兄は台湾の師範学校へ行き、教員となりました。

昭和十二年県立鹿本中学校卒業後、東京の國學院大学に進学しました。

当時、豊かではなかった木村家の家計にあつて、東京の大学に進学することが

できたのは、早熟な文学少年だった祐章の熱意にほだされた父と兄の理解と援助があつて叶ったことでした。

國學院大学時代

進学を國學院大学に決めたのは、感性豊かな国文学者であり、北原白秋らと『日光』を興した歌人としても広く知られていた折口信夫（釈道空）が在職していたことが大きかったと思われます。折口を顧問とする『青衿派』（せいぎんは）の同人となり、その編集にも携わり、終生「折口先生」を慕ってやみませんでした。『青衿派』の編集活動の中で実に多くの知友を得て、文学への情熱をかき立られ、ついには生涯の仕事になりました。

尋常小学校、鹿本中学時代からの文学遍歴の出発点については、はっきりわかる資料がありませんが、大学の予科時代から三年間改造社の校正のアルバイトで、俳句研究、短歌研究、改造本誌を

ちょっとコラム①

青衿派

青衿派は昭和十二（一九三七）年創刊の同人誌である。國學院大学の同窓である太田朝男（早稲田大学を中退して國學院に入学。角川文化財団初代事務局長）が中核になって角川源義（角川書店創始者）、木村祐章、二松学舎の佐古純一郎（文芸評論家・二松学舎大学学長）、日本大学の西河克巳（のち映画監督。代表作に吉永小百合や山口百恵を主演とした川端康成原作『伊豆の踊子』がある）らが参加して発足。

同人勧誘や執筆依頼は多岐にわたり、物資不足の戦時・戦後は一時、國學院大学の刊行誌『渋谷文学』に統合されたこともあるが、芥川賞候補作家やのちの著名な文芸評論家を輩出する文芸誌であった。



青衿派表紙

(第8 複製許可)

私に至るまで軍歴をたどると、誰しも自問自答を繰り返す。私は元白雲園の随筆士である。しかし、私は元白雲園の随筆士である。私に除くべき高橋政房の著書「信」の随筆を二冊持っていた。そして、私は、

昭和十六年に第一回の学徒出陣で三ヶ月早く大学を卒業し、熊本の西部十六部隊に入営しました。軍隊で学んだのは「早飯と早

木村 祐章

スズダレ兵隊

昭和十六年、一期の学徒出陣で、陸軍衛生隊の随筆士として、熊本の西部十六部隊に入営しました。軍隊で学んだのは「早飯と早

学徒兵の軍隊生活

昭和十六年に第一回の学徒出陣で三ヶ月早く大学を卒業し、熊本の西部十六部隊に入営しました。軍隊で学んだのは「早飯と早

卒業論文は「日本文学の一伝説―泉鏡花研究―」で、題名の決定と指導は主査の折口信夫教授でした。副査は金田一京助教授、ほかに、『万葉集全注釈』の武田祐吉、國學院大学学長になる佐藤謙三先生らの薫陶を受けています。

担当していたことが分かっています。当時改造社の名物文芸編集者として知られる桔梗五郎氏との親密な交友は、桔梗氏が横浜事件に連座して、南方の報道員として出発する前日、別離の盃が深夜まで及んだことを、自身の俳句日記に誌しています。大学では校内新聞の編集員をし、陸軍に入隊するとき、当時の文学好きがそうだったように、岩波文庫の万葉集二冊と俳句の季寄せを持って行き、暇があれば繰り返し読んでいたところをみると根っからの文学青年だったようです。

「養」と家族に話していましたが、病弱な身での軍隊生活は過酷なもので、仲がよい戦友と上官に恵まれ、戦地にも行かず何とか除隊することができたようです。

昭和三十五年頃の熊日新聞に連載された随筆「まん太郎ばなし 4 スズダレ兵隊」に赤裸々にそのことを書いており、青白い学徒兵の軍隊生活の様子を垣間見るために、原文のまま紹介しました。

折口信夫（釈道空）の影響

生前、「折口信夫」と呼び捨てにすると、身を震わせ、額に青筋を立て烈火のごとく怒り、「先生と呼ぶべき人は折口先生以外にない」と公言してはばからない最愛の師であり、学問の神的存在でした。

折口の伝説的な名講義にはどんなにアルバイトが忙しくても必ず出たといえます。師の「お姿を見、声を聞くだけで感激してしまい、教室の片隅にちぢこまっていた」くらいと書き残すほどに敬慕しました。「……古代研究」「春のこつぶれ」「海やまのあひだ」「死者の書」などむさぼり読んだ。私は遠い所から憧憬した。



昭和24年11月27日 2列目中央 折口 信夫 氏
場所は省営(旧国鉄)バス前 同 左 端 木村 祐章

ちよっとコラム②

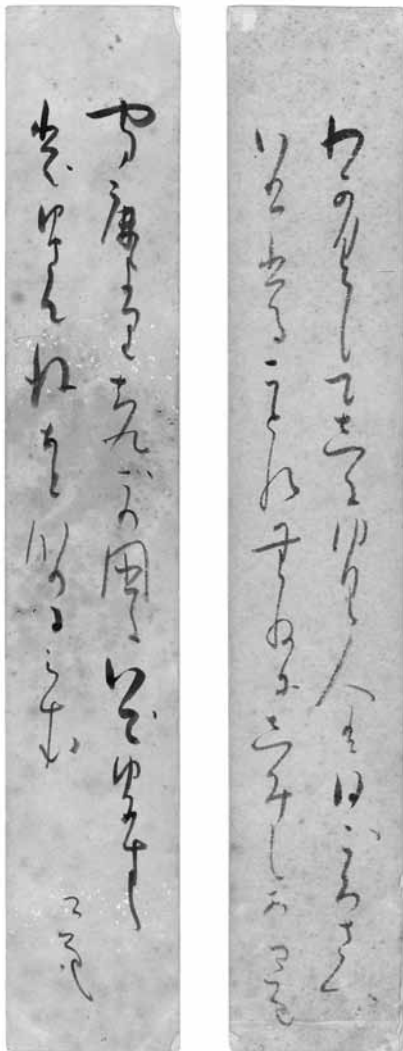
釈道空の短冊について

この短冊は、昭和24年11月に木村祐章が釈道空からいただいたものです。

右は「若(わか)くして 死(し)にゆく人は日ごろさへ
言ひ出る語(こと)の 胸(むね)に沁(しみ)しか」

左は「山(やま)鹿(か)より ちくごの国(くに)にいでゆかむ 出
でゆきて後(のち)あとなかるらむ」

山鹿での句はもう一首あり、「橋(はし)のうへに 白(しろ)ぬりのば
すとまりみて 山鹿(やまか)のまちの夜(よ)は あけゆきぬ」が『折口
信夫全集』25巻に掲載されています。



釈道空の短冊

先生を孤高な現代の隠者と仰ぎ、私ごと破廉恥な人間がお傍へまかり出ることとは、先生を冒瀆する以外なにもでもない、と、頑なに信じていた」と書いてあるほどです。

昭和二十四年、師折口が九州旅行の途中に山鹿の清流荘に宿泊されたおり、面会したときには感

激で何も言葉が出なかつたことを同行の木村の公私にわたる先輩である作家で歌人の伊馬春部氏がその著作に書かれています。同二十八年、「現代日本の最高の国文学者であり、歌人であり、詩人でもあった」折口逝去のときは、貧苦の中、蔵書売り払い熊



兄弟子の伊馬春部と祐章

本から師の墓所のある石川県の葬式に出かけました。生活に追われて、東京の親しい文学の仲間と交わることのできない祐章は熊本で悶々として過ごし、上京の希望を伊馬春部氏に訴えたとき、折口から「せっかく、山鹿に住みついたらのだから山鹿にしかないものを身につけて、それから上京するように」と伝言を受け、必死で民俗学の勉強をし、民俗芸能、民謡や昔話の調査や採集を続け、郷土史の研究に励みました。折口の言葉を支えとして。

その結果は『鹿本郡郷土研究資料』（昭和二十六年発行 鹿本郡教育振興会発行 木村祐章校訂）として実りました。表紙に折口が書いた「肥后山鹿湯町水虎山」の文字が添えてあり、解説の末尾に、「図は日本版画協会員田川憲氏の作品に、恩師折口信夫先生が病氣中の私をいつくしんで戯書されたもので、先生に無理におねだりして掲げたものである」と書いています。

そのほかの著作は、折口がいずれは出版を斡旋すると約束して

いたという『肥後昔話集』（同三十年）、随筆集『山鹿風土記』（同二十六年）などがあります。また、没後に長男の史彦がまとめた『肥後の笑話』（同四十八年）、『全国昔話資料集成6 肥後昔話集』（同四十九年）もあります。

民謡についての編著はありませんが、NHKの仕事で町田嘉章氏と九州各地を採集して回っており、その折の採集ノートは残っています。民俗芸能についても公刊されたものではありませんが、同様です。

肥後の盲人の琵琶である肥後琵琶は国の選択無形文化財の指定を受けていますが、その発掘と表舞台に出した功績も認められています。残っている資料や原稿は少なく、講演用原稿で「肥後琵琶概説」（肥後琵琶保存会発行『肥後琵琶』（平成三年）に掲載されたもののほか、外題を聞き取り、翻刻したものを雑誌に連載したものもあります。ほかに調査ノートがありますが、まとめる前に亡くなってしまいました。

調査は昭和二十五年頃から開始し、琵琶師の発掘から、資料調査、聞き取りを進め、三十八年に保存顕彰会ができました。当時の東洋音楽学会会長の田辺尚雄氏から古浄瑠璃系の希少価値のある芸能としてお墨付きを得ましたが、国指定の文化財に選択されるまで十年かかってしまいました。現在肥後琵琶を語ることができるのは、山鹿良之（芸名 玉川教演）氏に指導を受けたわずか数人で、後継者育成は不十分な結果になっています。

肥後琵琶演奏者の中でも、特に平成四年度の熊本県近代文化功労者になった山鹿良之氏との交流は長く続きました。このことについては『熊本文化』（第二二五号）の人物論に祐章からの関係を引き継いだ二男の理郎が詳しく書いています。平成六年には『肥後琵琶弾き 山鹿良之夜咄』（三一書房）をまとめました。

書き続けた生涯

昭和二十七年からラジオ放送の脚本を書き始めて、後にNHKの契約作家となり、熊本を中心に主に九州内で活動しました。放送作家協会の初代九州支部長も務めました。地方の作家の場合、中央の作家に比べ原稿料が安いだけではなく、放送業界が未だ安定していなかったことから、作家としての収入だけで生きていくことはかなりの困難がありました。

昭和三十年代には自宅の玄関の一坪ほどの土間で貸し本屋を営んでいたこともありました。脚本料が出るまでの間、一冊二十円程度の貸し本料を取り、日銭を稼ぎ生活費にあてて、やりくりしていたようです。（写真に「墨屋書房」の看板）

自宅にはすべての台本が残されており、本数にして千本を超えるドラマなどの脚本を書いています。ラジオが大半ですが、テレビ創世期の台本で、肥後にわかきの生放送用のものもあります。テレビ初期、近所で一番にテレビを購入、テレビの仕事に備えたものでしたが、もの珍しさで毎日多くのお客が集まり、原稿が書けないとぼやいていたこともあったようです。



作品の内容は連続ドラマから、文芸作品の脚色、紀行、民謡、昔話、歴史を訪ねる企画など様々です。

一番長く放送されたものは、故ばってん荒川さんのナレーションで四百五十九回放送の「おぼあちゃんの民話」（熊本放送）でした。昭和三十五年から三十八年まで続いた人気番組で、ナレーターがかわり何度か再放送されました。夕方放送された子ども向け連続ドラマ「どんぐり日記」も人気がありました。教育番組から国際放送、ミュージカルなどあらゆるジャンルまで作品の幅を広げていきました。

戦後まもなく旗揚げし、脚本で参加した「文芸座」という劇団をテーマにした連続ドラマ「宝石の唄」、構成ものでは郷土の歴史や人を取り上げました。詩人の淵上毛銭、俳人の山頭火、好きだった歌人の宗不早などについての番組を作っています。

ことに宗不早については愛着を抱き、昭和二十五年に山鹿で不早起念祭を開き、安永信一郎氏、渋谷了喜氏、荒木精之氏などが集まった記録を残しています。同年の「旬刊やまと」に十回にわたる「不早ノート」を連載し、山鹿にも歌碑を建てるべきと訴えています。

三十四年、県芸術祭参加作品で水俣病をテーマにした「白いドベ」（どべは汚泥のこと、工場から排出され海に沈んだどろどろの沈澱物を言います）の脚本を書き、録音までされましたが、どこからストップがかかったか明らかではありませんが、未放送に終わりました。当時、水俣病の原因が有機水銀との結論が出てはいなかったのですが、社会性のある問題に取り組み制作スタッフ、番組出演者とともに放送局のおよび腰を嘆いていたそうです。

果てしない執筆意欲―小遺言書

昭和三十八年、十一月に熊本市の江南病院（大江渡鹿）に入院しました。

ラジオ、テレビ脚本執筆のほか県の文化財専門員などの仕事で多忙になり、原稿を書きためては出かける生活が続くようになり、また。そのため日中は眠り、夜中に仕事をする習慣で睡眠薬がかかせず、酒の量も増え、心身ともに衰弱していった結果です。自由業の極みで、経済的に苦しくなり、妻はパートに出ましたが、友人、知人の物心両面での支えもあり入院生活を送ることができました。

しかし、若いとき病んだ肺結核がもとで昭和四十年五月に四十五歳で亡くなりました。

昭和四十六年、没後六年の七回忌に『小遺言書―木村祐章絶筆集』を自费出版しました。

熊本市の江南病院に入院中、医者から禁止されていたにも関わらず、隠れて書き綴っていた散文「メモランダム」のノートが見つかりました。生前はそれを誰も気がついていませんでした。本人は退院後に何かに発表するつもりだったようです。その中で「一日一筆、ハガキでも手紙でも、下手糞な詩でもよいから、書かねばならぬ。でないとペンが鈍る。頭が鈍る。材料に不足はない。部屋一杯に悲しみがある」（勉強）と、病床でも筆をおかない執念を持ち続け、そして「早く元気になって、このメモランダムを整理したいのだが、一昨年の夏から、やっと、書く気になってもう五冊目だ。高群さんの「愛鶏日記」に負けない格調の、短い随筆集にしたいのだが、このままでは駄目だ。元気になれば、きつといい散文詩に見せる」（メモ）と希望と焦燥感を繰り返しています。

山鹿灯籠と町おこし

民俗芸能・民謡の分野で、民俗学的な側面からのプロデュースにより、町づくりに貢献した功績もありました。

その一つは山鹿灯籠祭りを単に灯籠奉納行事としてだけでなく、盆行事としてとらえ、踊り灯籠を盆踊りの一形式として復活させる役割を果たしたことです。

江戸時代末からある山鹿の里謡「よへほ節」に合わせて、浴衣姿の女性たちが金灯籠を頭に載せて踊る灯籠踊りとして発展させた経緯について、多くは語られていません。

しかし、その後約二十年間、灯籠製作技術とともに灯籠踊りを日本夏祭りの一つとして、知名度を全国的なものにするため官民一体の努力が続けられてきた結果、今の灯籠祭りができあがったのです。

昭和三十年の芸術祭参加郷土芸能大会に山鹿灯籠踊りを出場させ、同三十二年は全国郷土芸能大会を山鹿に誘致、開催させました。同三十四年には郷土芸能バラエティ「火の踊り」を宝塚歌劇団協力、NHK後援、木村祐章脚本で上演。同三十五年にはSKD夏の踊りに取り上げられ、同三十七年には灯籠踊りを織り込んだ東宝映画「おてもやん」（美空ひばり・高倉健出演）口ケなど様々な全国への宣伝活動が継続されてきたことを忘れることはできません。

当時山鹿市の観光課で、灯籠祭りをほぼ現在の形式に近いものにされた行政のリーダーは森川恒臣さんという方でした。

『山鹿灯籠―松本清記翁米寿祝賀記念出版―』（昭和四十二年発行）の“あとがきにかえて”のなかで、森川さんは木村と灯籠とのかわりを次のように述べています。

山鹿灯籠の歴史と伝統を支えるものは、まず材料である紙に始ま

り、製作者や奉納者、そして無数の「見るも馬鹿、見ぬも馬鹿」のひとつとである。が、とくに終戦後の山鹿灯籠を今日に支えた演出者は故木村祐章氏ではなかったらうか。

いくたびか中央文壇への移籍を思いながら、山鹿の町は彼をここに釘付けにしてしまった。母の乳房にすいつくみどりごのように彼はふるさと山鹿への愛着にかぶりついた。（中略）昭和二十九年九月、この前身ともいうべき『山鹿灯籠：山鹿市』刊行のために彼は、その当時大事な時間を割いてくれた。（中略）彼がスクリーンのかげで、あるいは、作品構成の上で、山鹿の文化や観光にフットライトをなげかけたことの数々は、彼ならではできない業であった。今後彼のように田舎町の住人でありながら、よりすぐれた人々の関心と実動をよびおこさせる根じめの仕事（演出）をはたす役割りをほかの誰ができるであろうか。

ちよつと「フィルム」③

文芸座の旗揚げに参加

祐章と演劇の関係も深かった。古くは大学時代に歌舞伎と新劇にかふれ、戦後まもなく熊本市に発足した「文芸座」の旗揚げに参加している。このことは緒方猪一著『戦後の熊本演劇』（昭和五十八年刊）に詳しく書かれているが、代表は霜川遠志で、隆盛時のスタッフの演出部・文芸部に堀憲司、桜井逸馬、阿木祐介、辻孝八郎、伊吹五郎、山中重雄の名がある。九州の唯一の新劇の劇団として、戦後の復興に演劇、芸術面で貢献していききたいとの情熱で結成されたが、熊本の歌舞伎座での第二回公演を期に解散同様に、少人数での地方巡業で借金を返していき、福岡で解散したらしい。この劇団の顛末を題材に「宝石の詩」という連続ラジオを書いた。

山鹿の八千代座にも文芸座の舞台がかかったが、父芳太郎との口論があり、劇団の借金のかたに妻のタンスの着物が消えていったという話もある。父の目には旅役者の劇団としか映らなかったようだ。

年表 History

大正八年 (一九一九) 〇歳	六月九日、熊本県山鹿町大字山鹿一〇一〇番地に木村芳太郎・フサの次男として生まれる。父芳太郎の生家は中町で現在の油屋と江上薬局の間にあった。長兄計介(大正二年生)。
大正十五年	山鹿尋常小学校に入學
昭和七年	県立鹿本中学校に入學
昭和十二年 (一九三七) 十八歳	國學院大学予科入學、芳太郎の他、台湾師範卒業後、台湾の小学校で教師となった計介の仕送りを得ていた。柳田國男の『郷土生活の研究法』を読み、学園の対象として民俗学に興味を抱く。夏休みの帰省から母フサを主として昔話の採集を始める。さらに折口信夫の講義が始まり、民俗学を本格的に志す。このころより折口を生涯の師と定める。
昭和十四年 (一九三九) 二十歳	國學院大学国文科入學。「青衿派」「渋谷文学」などの同人雑誌に参加、阿木祐介の名で『台湾紀行』などの小説を習作。日本談義の荒木精之氏と親交が始まる。改造社への校正、祭礼の神主のアルバイトをする。
昭和十六年 (一九四一) 二十二歳	十二月二十六日第一回の学徒出陣で三ヶ月早く、大学を繰り上げ卒業。卒論は「田山花袋の『布団』について」。審査は主査折口信夫、副査金田一京助。初期結核の病歴をもつ虚弱体質だったが、一年六ヶ月の苛酷な軍隊生活に耐える。
昭和十八年 (一九四三) 二十五歳	兵役終了後、再び上京、東京都世田谷区に住む。七月十五日東京都日本産業福利協会入社、「安全生産」という安全運動の雑誌を編集
昭和十九年 (一九四四) 二十五歳	二月一日東京都昭和第一商業学校講師となる。三月三十一日渡邊春美と結婚のため帰郷、まもなく妻を伴って上京するが、五月一日、再び召集令状が来て山鹿に帰る。五月六日、熊本二十一部隊に応召入隊するも身体検査の結果、即日除隊で自宅に帰される。そのため上京することなく、熊本市健軍にあった昭和航空機製作所に十二月十五日入社、その社宅に住む。
昭和二十年	五月二十一日同製作所総務課長。五月十三日長男史彦誕生
昭和二十一年 (一九四六) (一九四七)	九州唯一の新劇劇団「芸芸座」旗揚げに参加。九州内で公演活動するが、一年で解散
昭和二十二年 (一九四七)	熊本三菱重工業第九製作所入社。熊本県立鹿本実業高校に勤務。このころ疎開していた版画家田川憲氏と知り合い一生の友となる。人吉の辻孝八郎氏と「三人」という同人雑誌を出す
昭和二十四年	山鹿中学校に転任
昭和二十六年 (一九五一) 三十二歳	二月『鹿本郡郷土研究資料 第一輯』(鹿本郡教育振興会発行)山鹿郡研究の唯一のまとまった古典である「鹿郡旧語伝記」の原本と出会い、ほかに農村習俗研究のため「民草婦利」「俳諧社中録」「金毘羅講中名簿」などを収録し、後藤是山氏、圭室謙成氏などの協力を得て、校訂・上梓
昭和二十七年 (一九五二)	山鹿中学校退職。放送作家に専念する。熊本中央放送局賞放送劇入賞。肥後琵琶の調査を始める
昭和二十八年	広島中央放送局懸賞入賞、熊本中央放送局懸賞入賞
昭和二十九年 (一九五四)	私家版『随筆山鹿風土記』発行(田中プリント社のガリ版印刷八月)。ラジオ放送で朗読、雑誌、新聞に発表されたものをまとめたもの
昭和三十年 (一九五五) 三十六歳	『肥後昔話集』(表紙、挿絵は版画家田川憲氏)熊本年鑑社より刊行。このころNHKの委託により、邦楽・民謡研究家町田嘉章(晩年佳声と改名)を監修とする民謡調査に九州担当として参加、数年間録音機を担いで九州の民謡を採集した
昭和三十一年	私家版『水虎随筆』発行(同前、五月)
昭和三十三年	私家版『河童の漫語』発行(同前、九月)
昭和三十三年	私家版『ゼーたん河童』発行(同前、十一月)NHK福岡の連続放送劇「三番隊出撃す」がNHKの優秀賞を受賞
昭和三十四年 (一九五九) 四〇歳	私家版『我楽苦多集』発行(同前、十二月)、熊本芸術祭参加のラジオドラマ「白いドベ」は水俣病を扱った作品だったが、録音されたが未放送となる
昭和三十五年	ぼつてん荒川出演「おばあちゃんの民話」(熊本放送)が始り、四五九回の長寿番組となった
昭和三十六年	このころ日本作家協会の九州支部設置にあたり、中心的立場で活動、初代の支部長に推薦される
昭和三十七年	熊本県文化財専門員に委嘱されて公式に民俗調査を続ける
昭和三十八年 (一九六三) 四十四歳	六月八日全国放送の芸術祭参加番組「ぬれわらし」(NHK熊本制作)がラジオ部門の大賞を受賞。天草のからゆきさんをテーマにした作品で、今福正雄、渡辺富美子出演で話題になった。十一月三十日江南病院(熊本市大江渡鹿)に入院
昭和四十年 (一九六五) 四十五歳	五月十三日病院にて逝去。闘病生活中、日記代わりに書いていた散文が見つかり、六年後に『小遺言集』木村祐章絶筆集』としてまとめる

近代の山鹿の偉人たち 025

故郷を掘り起こし発信し続けた文人 **木村祐章**

平成 25 年 3 月 発行

山鹿市教育委員会 教育部 文化課

〒861-0501 熊本県山鹿市山鹿 156-3
TEL 0968-43-1691

執筆者

木村 理郎

ご協力いただいた方 (敬称略)

木村 史彦

没後の出版物

『肥後の笑話』1970年(昭和45年)桜風社

『小遺言集』—木村祐章絶筆集 1971年(昭和46年)墨屋書房

『肥後昔話集』(全国昔話資料集成6) 1974年(昭和49年)岩崎美術社